おのぼりさんの記

田原文雄

文部省主催で東京で開かれるその名もいかめしい新制高等學校教員再教育指導者養成協議會に出席の爲本縣から派遣される一行十名が鹿兒島を出發したのが七月二十四日。私に取つては十年振りの東京であり、關門トンネルをくぐるのは始めてである。文字通り田舍者。一行の中には相當に東京に詳しい人もあるのだが。大部分は始めてゞはないが、不案内者である。赤げつとの旅人の持つ不安な期待で一杯である。果して恐ろしい東京なのだろうか。田舍者をびつくりさせる珍らしい東京なのだろうか。

暑い盛りだから固苦しい話は抜きにして輕い話と行こう。

最初に辛うじて命拾いした話。京都を出て間も無く大津に出ようという所に有名な逢坂山のトンネルがある。あの長いトンネルの眞中で機關車が故障で往生して了うた。やけくそに狭く機關車の煙がどんどん車内に入つてきて、その中前の人の顔もろく／＼見えなくなる。息は苦しい。頭は痛くなる。苦しまぎれに窓を開けたら却つて冷い空氣が流れこんで來て幾らか氣分がよくなつた。その中には、あきらめた機關車が煙を出さなくなつて、車内の煙が段々薄らいで行く。應援の機關車がやつと來て、動き出すまでその間丁度一時間半だつた。

あとで聞くとつい、最近にもこんなことがあつて、その時は二人程煙の中毒で死んだのだつたそうな。

「トンネルの中で死んだら、我々は出張途中だから公務死亡で、家族は扶助料がたんまり貰えるだろうなあ。」など、慾ばつた冗談が交されたのは、晴れた琵琶湖を左に眺める大津驛を過ぎてからの事であつた。

東京に着いてから二日目の會場の東京文理大のある大塚えは、宿舍からは省線電車で濱松町驛から東行のに乘ればいい事を最初の日に知つていたので。その朝はさつそうと、もう一かどの東京人らしい顔付で、K氏Y氏それに私と三人で、東行の電車に乘つたことだつた。が、さて時間はたつが、一向に大塚は來ない。昨日知つた覺えの驛名がある中はよかつたが、その中全く知らない驛名が次々と出て來る。段々不安になる。三人顔を見合わす。だが他の乘客には聞きたくない。田舍者と見られるであろう事が我々のプライドを傷つける。その中電車はゴウ／＼音を立てゝ大きい川(あとで知つたが荒川だつた)の鐵橋を越えて今日までと空氣の違つた一寸淋しい川口という驛に着いた。もうたまらなくなつて三人一緒に飛びおりた。兎角引違そうというわけで知らぬ顔でその終の切符で逆もどりしてこゝら邊で何とか乘換えたらよからうといつて田畑驛に降りた。そして恥をしのんで驛員に大塚行を聞いてやつと分り會場に驅けつけた時はすでに十五分遲刻。そこで三人今朝の失敗を反省して曰く。「山手線に乘ればよかつたのだ。山手線。山手線」と。川口とは地圖を見ると埼玉縣だつた。さて、山手線は大事な合言葉となつた。三日目から宿の大塚に近い巣鴨に變つた。四日目の晩、銀座の夜景を見ずして何の土産話ぞといふわけで四名で銀ブラと出たまではよかつたが。有樂町から省線で皈るといふ段取りになつてプラツトホームに出た丁度その時鮮かに山手線をマーク入りの電車がはいつて來た。間違なしと見たか何のちゆうちよもなくきよう／＼してゐたがその中一人がこれわ反對だ。大塚方面行きではなくて濱松方面行きだと言ひだしたので、あわてゝK氏に違ひぞ降りると叫んだ途端ドアが自動的にしまつて了つた。中のK氏出ようとしたがとう／＼發車してしまつた。我々三人仕方なく一足先に皈ることにして巣鴨の驛に降りた。驛前に燒鳥の屋台がある。晝間K氏が、この燒鳥屋には「ドンコ」のカバ焼があるから、是非ドンコの「共喰い」をして見たいと言つていた事を思い出して、では一つの話の樣に喰べて見ようということになつてノレンをくゞつたのだつた。ドンコ即ち食用蛙である。仲々美味しい。一寸小鳥の味がする。これはてな味などと褒めて、ほめられていい氣になつた亭主のドンコ(勿論ドンコなど、言いはしない)に關する自慢話を一くさり聞かされて、さて大枚百六拾五圓を支拂つてK氏にも一串土産に包んで宿に皈つてK氏を待つていた。間もなくK氏も皈つて來た。「さあ共喰いだ。」と差出したドンコのカバ焼にK氏にたつた今の電車の失敗も忘れて、喜色万面でかぶりついた。という所でまだ／＼赤げつとの失敗談は盡きないが。編集氏と約束した紙面が盡きたので殘りは次の機會に讓つて一先ずこの邊で……。(筆者は一部教諭)

文藝

藏書の中より

一部二年 石田耕三

少年文學全集これは改造社版である。私は一度目を通して、おや名作の集りだなど氣づいた。巌谷小波のこがね丸など面白く讀んだ。芥川龍之介の蜘蛛の絲などほんとにうつとりとなる。宇野浩二の文も木佛金佛石佛など新しさと氣品があつて私は好きである。小川未明の牛女など少年達に分る程度で面白く味へる。何といつても北原白秋の童話の所に來るともう子供になり切つた樣な氣がして來る。子供をよく解している。新鮮さが滿ち滿ちている。又この人の作とは知らなかつた歌など數多くあるのに氣附く、島崎藤村篇の子供のためなど、私は藤村の春待つし、この本にも子供のためにという欄があるが、全部讀み取つたので讀まね氣でいたのが、何だか引きよせられて行く樣な氣がしてならぬ藤村の文つまり子供のためにといふ文は藤村は子供が好きであるといふ氣持もくめるし、又自己の經驗それから子供の頃の記憶、話などの一とまとめにして書いてあり子供に理解出來、そして指導して行く親たちも良く讀めば心を和げるものがあろうと思ふ。幸田露伴のこれも改造社版であるが、面白く青年に與へられた樣な氣のする文だと思ひながら、私は何回もその本を讀んだ。連續的な面白さがあるからだ。德富蘇峰篇別冊に入るともう單刀直入錄位がやつと私には分る樣だ。その外は何となくむづかしすぎて讀んで行けば面白さうであるがすぐに行きづまつてしまふ。後日きつと讀破しようと念じてゐるが、たゞ古昔の文章というか又漢文まじりの文とでもいつた樣な文で少し政治的な又軍國主義的な感じがするからである。田山花袋などの旅の話などとても旅行そのものだ、一つしようにあちらこちら見物してゐる樣な氣のする文だ。現代短歌集現代俳句集になるともう有名な人々の作ばかりである。芥川龍之介の俳句などほんとに何ともいへない一句であるがこゝに揚げて見ると

〃蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな〃

歌壇

みずあげてひぐらし蟬のあはれにも
過ぎにし方の思はるゝかな

抽象的な思索にうみて瓦かけ
溝に蹴落し昂然と去る

しやちほこの南北向いて高千穗は
高く尊く雲かゝりけり

晒の帽子屋

心ある語は語らざる晒わびし
一人叫まで一人うなづく

こめかみに傳ふて流るゝ玉の汗を
袖で拭ひつゝ田草取るなり

夏日射ベンチに落ちて浮浪者の
姿かなしき松並木かな

やみつきて疲れ果てたる幼兒の
[illegible]

朝霧におもちやの自動車忘れてあり
[illegible]

針運ぶ我を笑みつゝ母は云ふ
[illegible]

夕ざれば川邊て友とたゝずみて
[illegible]

取り出でし去年の單衣のなつかしく
匂ひほの／＼我を包めり

喜々として泳ぐ子等を眺めつゝも
吹く松風にわびしさは

月見草老松もるゝ月浴びて
ほのかに咲きて匂ひぬるかな

耳近く鳴るエンジンの音聞きつ
しばし汗ばむ夜の舟にとり

より眞なるを唯只管に求めつゝも
うつろなる現實に心とざせり

若松芳樹
鮫島政一
原園一德
牧瀬俊廣
以上 皆元忠雄
池田統
緒方勝
前田正彥
安田久子
伊達澄子
藤田ハル子
山田壽子
松下律子
石田耕三
楠元愁窓

俳壇

裸子の足ふみしめて磯に釣る
波消えし御苑の水や合歡にたるゝ
野ぶどうのふかき青みの雨にあり
けづり氷の奥歯にとけて旅愁あり
蚊遣火のうするゝ果てに星が落つ
合歡の花けぶる谿間にすだれ吹き
告示板のビラ雨に飛び夏しぶる
書に倦みて風入る窓に雲の峯
[illegible]
岩洗ふ盆の潮に入日さえざえと
韓國は眞上にありて宵更けぬ
旅にあり晴き灯冷え／＼と
夜釣舟送りし足に潮滿ち來
夏雲の紫尾をふまへて陶白く
今宵又松の木蔭で海を聽く
早苗とる我が手にうるさく青蛾とぶ
雲の峯崩れて渦の鳴戸かな
朝もやにうすれて見ゆる遠き人
仕事終へて稻田に遠き誘蛾燈
墓拜む老女の背寂し入陽かな
足の蚊を足で追ひけり夕涼み
いぶされて逃れ去る蚊の聲細し
蚊遣火や兒が寢かせる子守唄
誘蛾燈に蚊の集りて夏しげし
夕涼み初星さがす縁の子等
裸子を裸に抱いて汗ばみぬ
思ひ切り酷暑の胸をはだけけり
蓮活けて身の行末を思ひけり

石田耕三
鮫島白萍子
若松芳樹
池田統
緒方勝
原園一德
鮫島淑子
北迫照子
植元睦雄
上野學
伊達澄子
藤田ハル子
皆元忠雄
鈴木紅子
關和登
小原俊幸
關正俊
鮫島韓
山内八重子
楠元愁窓
松下律子

〔スポーツ〕

=水 泳=

八月八日於鹿三部

自由型百	山本	2位
二百	澤口	3位
	山本	4位
四百	澤口	3位
平泳二百	湯浦	3位
	牽山	6位
背泳 百	池田	5位
繼泳八百	(江畑 澤口 永井 山本)	2位
三百米メドレー		3位

個人戰の爲順位はつかず國体縣代表次の三君 湯浦 山本 澤口

八月二十六日 (縣代表記錄會)

自由型百	山本	1位 (1分6秒)
四百	澤口	1位 (5分22秒)
二百	澤口	1位 (3分30秒)

=鹿宮對縣陸上競技會=

本校より山元 川久 兩君出場 戰績次の通り

山元 百米 2位 二百 6位

川久 砲丸 2位

=野 球=

定期野球第一回戰

川高對川市高は 21對2で大勝

肥薩野球大會

於水俣體育グラウンド

川内高校チーム遠征

第一回戰(八月七日)

八代工業對川内高校は 4對10Aで輕く勝つた

投捕 八 本村―赤松

　　 川 丸山―中島

準優勝戰(八月八日)

主戰投手病欠にて惜敗す

川高對水俣は2對3A

投捕 川 川畑―中島

　　 水 江口―中村

連絡船―引揚者の手記―(下)

二部中三年 大山德

船は深夜の海峽の何處を走つてゐるのであらうか、私の肉体は他人のもののの樣に疲れ果てゝはゐるが神經だけは、異常に冴えてなか／＼眠つかれないのと同樣に、船内の重なり合つて眠つでいる人々も今宵は何故か疲つかれないらしい。おそらく此の人々も父と同樣に何回も往來した朝鮮と連絡船の追憶を胸が痛む程色々と思ひ出してゐるのであらう。思へば古い連絡船は、多くの人々の夢のかず／＼と優越感とを乘せて幾百回となく玄海なだを往來し、その夢と優越感がなさしめた多くの成功もみ塵に打ち碎かれて歸國する今。どんなにか哀愁にみち溢れた、この群像よ！ それにくらべて現實的に何時も苦々しく思つてゐた日本人の厚顔無知な優越感が全く新しい歴史によつて一新され希望に燃えつゝ獨立を叫ぶ朝鮮！その朝鮮に我々の新しい夢と眞實な愛を乘せた、新しい連絡船が往來する時こそ連絡船は玄海をへだてる兩岸の眞の柱となるであらう。そして東洋永遠の平和の使命を帶びるなくてはならないものになるに違ひない。

、、「もう港が近くなつたよ。早く起きて甲板へ出なさい。」と言ふ父の聲にはつと目がさめた。何時間まどろんだことであらう。起きてみると、相變らずすぐれない顔をした母がもうすでに起きて坐つていた。船の丸い窓を通して朝の日射しがくつきりと光の筒を投入して、船室の亂雜と疲勞を浮き上らせてゐる。ざわ／＼と船のへさきでかきわける波の音が機關の音に入り混つて、聞える。ペンキ臭い階段をくゞつて甲板に出てみる。あゝ何といふ母國の海の素晴らしさよ！曉の蒼空に映える、岬、海、終戰後一日として偲ばないことはなかつた母國。その母國をこの眼で見とどけ、たどりつき得た無限の喜びに、輝くH港に向かつて、心からの感謝を捧げた。何時の間にか頬を流れる涙に、かすんで行くふるさとの山々に何時までも、何時まで

(終)

◇原稿募集◇

論文 作文	八百字以内
プロフエシヤの横顔	三百字以内
世論記事	四百字以内
小說 創作 隨筆	千二百字以内
詩	二十行以内
和歌	五句以内
俳句	五句以内

毎月十五日締切 (次號は九月十五日迄)

一部 二部學校内輿論箱投入の事